

原始仏教經典の成立について

——韻文經典から散文經典へ——

荒 牧 典 俊

一、インド古代祭儀共同体文化の 墮落と「輪廻の洪水」

インド・アリアン諸部族がインダス河上流域の五河地方に侵入して遊牧生活をなし、その中のいくつかの諸部族がヤムナー河・ガンジス河上流域のクル・クシエートラに進出して漸次に定住し、またさらにその中のいくつかの諸部族が東へ東へとガンジス河下流域を先進して定住度を高めていく——というような数百年に及ぶ歴史過程において西北インドの故地に滞留したり北インド中原地方に定住しはじめたりした諸部族ほど、かれらに伝統

的な祭儀共同体文化を保守的に祖述し伝承しようとしたであろうし、東インドへ先進した諸部族ほど、祭儀共同体文化の墮落を批判して革新的に新しい苦行者文化を創造しようとしたであろう。古来の祭儀共同体文化は、一言にしていえば旧年末に混濁の極みに達したカオスの海の中に神々を招請し神々と一体となった王及び諸祭官がコスモス創造の祭儀を執行し新しい生命に満ちたコスモスを再創造する。しかしそのコスモスもやがてまたカオスへと墮落して旧年末から新年にかけて同一の祭儀を反復しコスモスを再生させるという円環構造をもつが、時代が下降するにつれて、祭儀のもつコスモス創造力が減

衰えていき、カオスの海の混濁を克服しコスモスの生命を再創造することがいよいよ困難になっていく。いかに祭儀を莊重にし厳肅にしても、カオスの海の混濁が蓄積しつづけてコスモスの生命が再生され難くなっていく。そのように祭儀共同体文化がようやく円環性を喪失しカオスの海がいよいよ深淵化してくるにつれて、とくに東インドに先進したバラモン諸祭官が、祭儀共同体の外に出て森林の中において単純な祭儀だけを執行しながら、古来の祭儀のもつコスモス創造力とは何かを思惟するようになる。かれらは、その古来の祭儀のもつコスモス創造力がひつきよう祭儀において象徴的に言葉の靈力などによって現成してくる真理 (Ita あるいは satya, また brahman) にもとづくことを思惟し、まずは自己自身 (atman) において主体的もしくは実存的に祭儀の根源の真理そのものを体得しようとする。かれらは、このようにして体得した祭儀の根源の秘密の真理を、最も単純化された定式、ブラフマン即アートマンなどの同一律 (upatisad) に要約したり、ガーター詩 (gāthā) とよばれる新しい文学形式によって表現したりして、かつそれをどこまでも

秘密の真理として祭儀共同体の外なる森林の中において伝授しようとした。かくしてかれらの間からアーラニヤカとかウパニシャッドとかとよばれる文献群が成立する。

ところで古代祭儀共同体文化がどんどん墮落していったカオスの海がいよいよ深淵化していくとき、いっしかそれが「輪廻の海」「輪廻の洪水」(cārya) の様相を現してくる。いわばカオスの時間性へと流動化していつてはコスモスの永遠性を現成させるという円環構造が喪失されてしまつて、無始無終の時間だけが、無底に流動しつづける。そのように古代祭儀共同体文化の墮落という歴史状況を「輪廻の洪水」として自覚しはじめた人々こそ、祭儀共同体の外に出て森林の中で思惟した修行者群であったが、かれらはやがて二つの類型に分化する。すなわち第一の類型の人々は、たしかに祭儀共同体の外に出て森林の中で修行し、しばしば出家比丘ですらもあったであろうが、しかしかれらは古来の祭儀共同体文化を根本的には肯定している。かれらは、祭儀のもつコスモス創造力の根源にある真理を主体的もしくは実存的に

体得しようとして、いかにしてそのコスモスの根源の真理からコスモスの多様な「個体存在」(名色 nāmarūpa) が創造され、ふたたびそこへ帰滅していくかを思惟した。しかも「禪定」(dhyāna) の心集中において思惟し禪定のきわみにおいて根源の真理を体得しようとしていた。したがってさまざまな禪定の心集中のしかたによって、さまざまな内容の根源の真理を体得していたであろう。かれらこそが、中期ウパニシャッドからサーンキヤ・ヨーガ哲学を展開させていく。

つぎに第二の類型の人々は、古代的祭儀共同体文化の墮落を、ひたすら深淵的な「輪廻の洪水」として体験する故に、祭儀共同体文化を根底的に否定してしまふ。かれらは、祭儀共同体を存続させてきた祭儀行為(それはいまやすべての日常的行為であり業 karma とよばれる)を徹底的に拒否し、それらから完全に自由になるべく、出家者の戒律を厳守する。とくに祭儀において犠牲獣を殺すこともふくめていかなる殺生をもしないこと、不殺生を根本戒律とした。そのようにすべての日常的行為を放棄していかに微小の生命をも殺生しないようにす

ることは、それらの行為をなすように「学習」してしまつた身体存在を拒絶することになり、そこからややもすると身体存在を極度に苦しめ身体存在を虚無的に否定しようとする苦行主義に陥ることとなる。かれらこそが、ジャイナ教やアーजीヴィカ派などの苦行主義の伝統を形成していく。

インド古代祭儀共同体文化がいかなともし難く墮落してしまつて「輪廻の洪水」として体験されるときに、祭儀共同体の外に出て森林の中にあつて、第一にはいかにしてコスモスの根源の真理から「個体存在」が創造されては帰滅するかを禪定において思惟したり、あるいは第二には苦行して身体存在を滅無したりしようとする、しかもかれらのそれぞれがいくつにも分派して「わが宗旨こそ最高の真理」と主張して論争しあつていく——ここに略述しような思想状況の中でこそ釈尊が出現する。釈尊は、たしかに第二類型の伝統から出自して、出家者の戒律を厳守し身体存在から自由になろうとするのではあるが、苦行主義によって身体存在を滅無しようとすることを批判する。そのように身体存在を實體化して

おいてから滅無するのではなく、身体存在を表層とする
個体存在を個体存在たらしめている最深層の欲望（渴愛
taṇhā）もしくは自我意識を放捨せよ、そしてそのために
個体存在の深層構造を禪定において思惟し究明するがよ
い、そうすれば自ずと深層の欲望や自我意識もなくなり
個体存在も消滅すると説く。このように第二類型の苦行
主義の伝統の中に第一類型の個体存在を消滅させる禪定
の伝統を導入して宗教改革している。そのような新宗教
として原始仏教は展開していく。

以下、本稿において論ずることはまずつぎのことを前
提する。第一類型の中期ウパニシャッド以後の哲人たち
も、第二類型の苦行者たちも、ガーター詩によってかれ
らの思想を要約して伝承していたが、釈尊などの最初期
仏教者たちも、ガーター詩の伝承を継承して韻文・經典に
よって原始仏教思想を展開していく。したがってまず韻
文・經典を新古層へ分析することによって最初期の原始仏
教思想の展開過程を説明することができであろう。つ
ぎにつづいて発達してくる散文・經典を（主題ごとに多く
系列に分けて各系列ごとに）新古層へ分析することによ

って次の段階の原始仏教思想の展開過程を説明すること
ができるであろう。このようにガーター詩の原伝承を継
承して原始仏教の韻文・經典の新古層が成立し、つづいて
散文・經典（の各系列）の新古層が発達していく、という
ことを、ここでは詳細に論証することなく、むしろ前提
しておく。その上で逆にこの前提が正しい前提であるこ
とを例証するために、最古層韻文・經典の中から釈尊の根
本思想を説くと考えられるものを取上げ、韻文・經典の新
古層から散文・經典の新古層へとその根本思想が展開して
いく過程をあとづけ、そこから六処・五蘊・縁起などの
根本教理が成立することを論証したい。すなわちガーター
詩の原伝承を承けて韻文・經典から散文・經典へ発達する
と前提するときはじめて、釈尊の根本思想から漸次に六
処・五蘊・縁起などの根本教理が成立していく過程を解
明し得ることを論じたい。それがまた以上略述した思想
状況の中で釈尊の根本思想が成立し原始仏教思想が展開
していくことを論ずることとなり、またけつして明確
であるとはいえない難いそれらの根本教理の原義を文献学的
に確定することともなろう。

二、釈尊の根本思想

しからは西北インドから中原地方を経て東インドへと
数百年にわたって波状に東進するにつれてヴェーダ祭儀
共同体文化は、漸次に墮落しいよいよ深淵化し「輪廻の
洪水」の様相を現してきたが、それがより深淵的であっ
たのは、とくに東インドのバラモン哲人や苦行者にとっ
てであった。そのような古代の祭儀共同体文化の墮落に
もとづくニヒリズム的歴史情況に迫られて、かれらバラ
モン哲人や苦行者は、祭儀共同体の外に出家し森林の中
でコスモス創造の哲学を禪定において思惟したり、身体
存在を滅無させようと苦行したりしていた。しかもかれ
らの間には、いずれが究極の真理（への道）であるかを
決定するために論争する伝統があつて、とくに祭儀にお
ける犠牲獣の殺生の可否をめぐるのはげしい諍論があつ
た。いまや森林の中で修行する哲人や苦行者までが諍論
に堕しているという絶望的な歴史情況を克服しようとし
て釈尊は、新しい真実の道を説いていると考えられる。

ここに釈尊がいかにして新しい真実の道を見出したかを
説く經典がある。それこそが釈尊の言葉だといえるので
はなからうか。

原始仏教經典の最古層である『古経集』(Suttanipāṭa)
「八詩頌章」(Aṭṭhakavagga)は十六の韻文・經典よりな
る。それらの諸經典の主題は、他学派のバラモンや苦行
者が対論抗争しているところの根本に深層の欲望や自我
意識がはたらいっているという論争批判であるが、それら
の諸經典の根本思想を説くと考えられるものに「他の生
物や人々に暴力をふるうこと」という題の經典がある
(Sn 935-936)。訳解しながら、ごく簡単に説明しよう。
ここにおいて釈尊は、第一人称表現によって自らの根本
の宗教体験を想起する。

「他の生物や人々に暴力をふるって悪業を積むような
ことになつてはならない、という不安が生じてきた。

そして論争したり喧嘩したりしている人々を見て、わ
たくしが、どのようにしてこの世の存在を厭い捨てる
心をおこしたか——厭い捨てる心のことを説こう」

(Sn 935)

「あたかも沼や池の水がどんどん干上っていくとき、無数の魚が生きのびようとして、あっちこっちへ跳ねまわり、お互いにぶつかりあうように、そのように生物や人々が生きんがためにあっちこっちにのたうちまわり衝突しあっているのを見て、わたくしはいかんともし難い不安のとりこになってしまったのである」

(Sn 936)

「無限の過去以来、上は神々の存在から下は地獄の存在に至るまで、あらゆる方位の日常的存在へと、一から他へとつき動かされて輪廻転生している——いかなるところにおいても日常的存在は根柢からしてうつろい実質がない。どこかにわたくしのアトマンがいない安らうところがないものか、とさがしまわってみたが、わたくしが見たのは、いい加減なところに安住している人々ばかり」(Sn 937)

古代末期に祭儀共同体文化が墮落していくこと一つに、それにもとづく共同体社会も崩壊し混乱していくが、そのような歴史情況が「生きんがために」衝突しあ

い暴力をふるいあっている、その最深層においてははてしなく「輪廻転生」していると体験される。それを超克しようとして森林にあって禅定を修行し苦行している人々も、「いい加減なところに安住し」いまだ輪廻の内にある。そのようである根本原因は何か。

「しかもその人々がかく安住していることによって『われこそは最高究極の真理を知った』と主張しては論争しあい対立しあっているのを眼のあたりにして、わたくしは絶望的になった——ふとその瞬間、わたくしはあらゆる生物や人々の心臓に一本の矢が突きささっているのを見た」(Sn 938)

「その心臓に突きささった矢のエネルギーによってつき飛ばされて、あらゆる生物や人々は、あらゆる方位の日常的存在へと輪廻転生しつづけていく。いまでも、その矢をさえ引抜いてしまえば、もはや輪廻転生することはあるまい。もはやはてしない輪廻の洪水の底に沈んでいることもあるまい」(Sn 939)

無限の過去以来あらゆる生物や人々は、その最深層に

において「輪廻転生」しつづけている。否それを超克しようとして禅定において修行し苦行している人々すらも、

「輪廻の洪水の底に沈んで」じっとしているにすぎない——

というようにあらゆる生物や人々がはてしなく輪廻の洪水に押し流されているのは、かれらそれぞれの最内奥の「心臓に一本の矢が突きささり」、その矢のエネルギーによって突き動かされているからである。釈尊が、ここで発見した心臓に突きささった矢とは、次下に説かれるようにいつまでも日常的存在として生きつづけるようとする最深層の欲望である。つぎの五詩頌は、この經典のテクストに問題があつて後世の増補かと疑われる。ここでは省略して次の詩頌を引く。

「わたくしは言う、はてしない輪廻の洪水であるのは、生物や人々の最深層の欲望である。わたくしは言う、あちこちに向う激流であるのは、そのときどきの衝動的な欲求である。漂流物であるのは、つぎつぎにさまざまな存在でありたいと意思しつづける構想しつづけていくときの対象存在である。ああ、まことに最深層の欲望の底なしの泥沼を渡りきることは難しい」

(Sn 945)

当時の歴史情況を「輪廻の洪水」として体験することは、バラモン哲人や苦行者にとっても同様であったが、その輪廻の洪水を、釈尊はここでいつまでも日常的存在でありつづけるようとする最深層の欲望によって定義している。これは、釈尊の新発見である。これこそが、仏教独自の真理になる。すなわちあらゆる生物や人々が輪廻の洪水に押し流されていることの最深層の根柢がそのような日常的存在として生きつづけるようとする欲望であるということとは、それぞれの人間がその最深層の根柢である欲望の「矢をさえ引抜いてしまえば」、輪廻の洪水から解脱して自由になることである。ここにおいて輪廻の洪水から解脱して自由になるためには日常的存在でありつづけるようとする最深層の欲望を放捨せよという新しい修行道が発見された。かく輪廻の究極の根柢を究明し、その究極の根柢を消滅させるべく修行せよ、というのが仏教の真理である。それではその最深層の欲望を放捨するべく、どのように具体的に修行するか。さきに述

べたように釈尊は、苦行者の伝統にしたがって出家し不殺生などの戒律を固守していたが、さらにあらたに禪定において思惟するという修行を導入したと考えられる。この経典においては、禪定における思惟の最上位の修行だけが説かれている。

「無限の過去以来、漏水し浸水してきた輪廻の洪水の汚水を干上らせてしまいがよい。未来についても、いかなる存在をも志向しないようにするがよい。いまこの現在においても、それぞれの日常的存在に執著して離さないということのないようにするがよい。このように禪定において思惟しつつ静寂なるままに修行していくがよい」(Sn 930)

「かくして過去についても未来についても現在についても『個体存在』をわたくしのものとして所有するところがないならば、……この世にありながら年老いることもない」(Sn 950)

「無限の過去以来、漏水し浸水してきた輪廻の洪水の汚水」とは、無限の過去以来、輪廻の洪水に押し流されて

きたあらゆる生物や人々の日常的存在のもとなる身体存在を「壊れて漏水する舟」に譬え、かれらがさまざまな善悪の日常的行為を反復し「学習」し蓄積してきたことを「漏水し浸水してきた」と譬える。すなわち「漏水・浸水」とは、無限の過去より輪廻転生してきたとき、あらゆる生物や人々がそれぞれ、いつも日常的存在であるうとして善悪の日常的行為を反復し「学習」し蓄積し、それに条件づけられて日常的存在のもとなる個体存在が存在してきたが、そこにおいて無限の過去よりの無数の善悪の日常的行為の蓄積が深層の条件となつて、現在の日常的存在のもとなる個体存在が存在させ条件づけていくことを意味する。そのように無限の過去よりの無数の日常的行為を蓄積してきた個体存在の存続に条件づけられて、そのときそのときの現在の個体存在が存在しつつけていくと考えられる。したがって「輪廻の洪水の汚水を干上らせる」とは、そのように無限の過去よりの無数の日常的行為を蓄積してきた個体存在の存続に条件づけられて存在しながら、ここにおいて日常的行為をなしつつけることをやめること、もはやそれ以上「輪廻の洪水

の汚水」が漏水しないようにすることである。しかしそれでは、どのようにしてやめるか。「未来についても、いかなる存在をも志向しないように」し、「いまこの現在においても、それぞれの日常的存在に執著して離さないということのないように」してである。すなわち未来においても日常的存在でありつづけようと志向し、現在においても日常的存在に執著することによって、日常的行為をなしつつける。したがってそのような志向、そのような執著をこそ、まず放捨せよという。もとよりそうすることができるのは、古来の祭儀共同体における日常的生活から出家して「禪定において思惟しつつ静寂なるままに修行していく」からである。

ところで釈尊をはじめとする最初期仏教者は、出家して禪定において思惟しつつ、無限の過去より存続してきた日常的存在を止滅させるべく、日常的存在への志向と日常的存在への執著を放捨していく。それでは、そうしていつて最後にどうなるか。前後の文脈からして、まずいつまでも日常的存在でありつづけようとする深層の欲望を放捨する。さらにそれとともに「かくして過去につ

いても未来についても現在についても個体存在をわたくしのものとして所有することがない」とこととなる。無限の過去以来存続しつつけてきた日常的存在の深層部をとくに個体存在とよぶ(このリグ・ヴェーダ以来のコスモス創造論に由来する語は、釈尊が独自に導入したのであって、他学派には絶えて見られない。而來仏教に固有の根本語となる)。いつまでも日常的存在でありつづけようとする深層の欲望は、その根柢において個体存在を保持しよう、「わたくしのものとして所有」しようとしていた。このように深層の欲望と一つに「わたくしのものとして所有する」自我意識がはたらいているが、それら両者は、ともに過去から現在さらに未来にわたって存続しつつける個体存在に執著している。したがっていま禪定の修行の究極においてその深層の欲望が消滅し、わたくしのものとして所有する自我意識も消滅するとき、個体存在も止滅する(、あるいは哲学的により厳密にいうと個体存在が個体存在として社会的に他の個体存在と関係することがなくなつて、つぎに説かれるようなあらゆる生物や人々と「平等」なる共同存在へと解脱して自由

になる)。かれら最初期仏教者は、禪定の修行の究極において深層の欲望を消滅させ、自我意識を消滅させ、個体存在を止滅させるように修行していた。したがって以後の初期仏教者は、このような禪定修行の伝統を継承していきながら、さらに具体的に「どのような個体存在が止滅するか」、そしてさらに分析すると「何が個体存在であるか」を究明していくであろう。

本経典の最後において釈尊は、もはや「個体存在をわたくしのものとして所有」しなくなった修行者がどのように解脱して自由であるかを説く。

「そのような沈黙の聖者、牟尼は、説法するのではあるが、他の人々と較べて『対等』であるとか『劣等』であるとか『優等』であるとかという自我意識をもつことがない。静寂なるままに、いかなる所有の欲望もない……」(Sn 964)

以上論じたようにあらゆる生物や人々を押し流している輪廻の洪水から解脱して自由になるということは、それぞれの修行者が出家し禪定を修行して、過去・現在・

未来にわたる日常的存在への執着から漸次に離脱し、最後にかれ自身の深層の欲望とともに自我意識を消滅させ、個体存在を止滅させることである。そのようにかれ自身の個体存在が止滅するということは、かれ自身が存在しなくなることはない。そうではなく他の生物や人に対して自我意識をもって「対・劣・優等」など対立しないことによって、かれらと「平等」なる共同存在として自由に説法しつつ生きることである。あらゆる生物や人々と平等なる共同存在——いわばあらゆる生物の生命そのものと一体——であるとき、「この世にありながら……年老いることもない」のである。その意味で釈尊は、「常在靈鷲山」といえるところもあるであろう。

三、原始仏教思想の展開

インド古代末期に祭儀共同体文化が墮落して輪廻思想になり、それを克服しようとしたバラモン哲人や苦行者までがよい加減な禪定の位に安住して対論抗争するというニヒリズムの歴史状況から解脱して自由になるための

真実の道を説いたのが、釈尊の教えであったといえるであろう。バラモン哲人たちがウパニシャッド哲学の伝統を継承しながら、あらたにサーンキヤ・ヨーガやニヤ・ヴァイシエーシカなどの古典哲学を展開させるのも、仏教の深層の欲望からの離欲という根本思想を導入することによってではないかと考えられるし、何よりも以後、釈尊の教えに従って修行する仏教者が、どんどん等比級数的に増加し原始仏教教団が成立し、アショカ王の仏教帰依などもあってインド全土を仏教化するにも至るであろう。

ところでいま仏教者がどんどん増加し原始仏教教団が成立していく時期に、上述したような釈尊の根本思想はどのように展開し、さまざまな仏教教理へと体系化されるか——以下、韻文経典から散文経典への発達過程に即して、そのような思想展開をきわめて要約して論述しておく。

1、『古経集』『超脱章』(Paṭṭaṇavagga)

釈尊に直接つづく世代の仏教者は、上述した釈尊の教

えにしたがって出家し禪定を修行し深層の欲望と自我意識を消滅させ個体存在を止滅させようとする。かれらは、そうすることによって釈尊の根本思想を継承しながらも、さまざまな新しい問題に直面してはその根本思想を展開させていく。『古経集』『八詩頌章』の諸経典が釈尊の説法をまとめて韻文経典にしている如くでいわば説法体であったのに対し、ここの「超脱章」の諸経典はバラモン門弟が問い釈尊が答える問答体である。かつて論証したように、これは実際にあった問答の記録ではない。かれらは、このような問答体形式の経典によって釈尊の根本思想を継承し展開させるのである(「八詩頌章」の経典にもとづいて「超脱章」の経典が成立していることについては、例えば、第十一経「バラモン門弟ジャトウカンニの問い」が世尊の答え Sn 1099 として、上引の詩頌 Sn 969 を引用することなどを参照)。

さて「超脱章」の諸経典があらたに直面することとなった根本問題は、釈尊が「直々に体験したのであって伝承や伝聞によるのではない真理」にもとづいて禪定を修行するとき、究極的にはどのように個体存在が滅するか、

すなわち個体存在が表層からして漸次に減していくとき最深層であるのは何か、ということであった。「八詩頌章」に編入されるが、その諸経典の総結であって定期的に「超脱章」に並行する経典「鬘論争経」(Sn 862—Sn 877)は、世間の人々が鬘論争し論争することの根拠を漸次に究明していった最後の根拠である個体存在がいかにして減するかを問う。身体存在 (rūpa) も減し安楽や苦悩の感情存在 (vedanā) も減したときに、

「日常的概念構想がはたらいって概念構想 (saṃjñā) があるのでもなく、理論的概念構想がはたらいって概念構想があるのでもなく、さりとていかなる概念構想もなくった禪定にあるのでもなく、あらゆる概念構想を超克してしまっているのでもない。……一つ二つと数えられる「個体」存在は概念構想が条件となつてこそ存在するからである」(Sn 874)

このように存在するのでもなく存在しないのでもない概念構想の存在する禪定からも解脱して自由になるとき、究極的に個体存在は減してしまう。これに対して

「超脱章」の諸経典があらたにとくに提言する根本思想は、つぎの詩頌に要約される。「いかにして主体存在と身体存在よりなる個体存在が減するか」という問いに答える。

「……それぞれの日常的存在の意識の流れ (vīṭāna) が減してなくなってしまうとき、まさしくそのような「禪定の段階」において、ここなる主体存在と身体存在「すなわち個体存在」が減してなくなってしまうのである」(Sn 1037)

禪定において個体存在が表層から漸次に減していった、最後に減するのが意識の流れである。したがって無限の過去以来存続しつづけてきた個体存在の最深層にあつて存続しつづけて、最高の禪定の段階においても存続しつづけていたのが意識の流れである。「超脱章」のいくつもの経典が、いかにしてその意識の流れが減するかを説いている。しかし思想的にとくに重要であるのは、第五経「バラモン門弟ウパシーヴァの問い」(Sn 1039—Sn 1076)である。上述の釈尊の根本思想にもとづいてウ

パシーヴァが問う。

「シヤカ族ひのとよ、わたくしは、ひとり離れて修行して、何らかの対象存在たる漂流物に依拠することなしには、かぎりなく広大な輪廻の洪水の海を渡っていくことができません。……それに依拠してわたくしがこなる輪廻の洪水の海を渡っていくことができるような対象存在たる漂流物を教えて下さう」(Sn 1039)

釈尊が、はてしない輪廻の洪水を渡っていくには、さまざまな存在でありたいと思ひし志向しつづけるときの対象存在たる漂流物を放捨せよと説かれたことを知りながら、それにもかかわらず何らかの対象存在たる漂流物を把握することなしには渡り得ないと哀願している。つぎのように答えられる。

「……いかなる存在も存在しない禪定の世界を実現するように思惟を集中させ、いかなる存在も存在しないという思惟に依拠して、輪廻の洪水の海を渡っていくがよい。欲望の対象を放捨していき、つぎつぎに論難する論議もやめてしまうことによって、いつまでも日

常的存在でありつづけようとする深層の欲望が減し尽きた涅槃を、昼となく夜となくありありと見るようにするがよい」(Sn 1070)

この教えに従って「いかなる存在も存在しない禪定の世界に依拠して他の禪定の世界を放捨していく」とき、「あらゆる欲望の対象を愛好する愛著も消滅してしまひ」、「究極的にあらゆる概念構想から解脱して自由になる」。そのように究極的に解脱して自由になるとき、そこに静寂なるままにあつて「もはやそれ以上どこへも行かない」。しかしそれにしても「久しい年月にわたつて」そのままであるとすると、「そのような真実なるひとにも意識の流れが存在するのではないか」。そこで答えられる。

「……譬えばランプの焰が燃え上っているとき、突如強風が吹きつけてくるならば、消滅してしまひ、一つ二つと数えられる存在ではなくなる。そのように沈黙の聖者も、それまで存続しつづけてきた主体存在から解脱して自由になるとき、……一つ二つと数えられる

存在ではなくなる」(Ga 1073)

古代末期のニヒリズムの歴史情況の中に釈尊が出現したということは、釈尊の教えをよるこびそれに従い修行する仏教者が、どんどん増加していき、かれらがそれだけのしかたで禪定を修行し究極的に個体存在を消滅させ一つ二つと数えられることのない共同存在を体得していた、あるいは少なくともしようとしていたということである。かれらはやがて舍利弗尊者を長老とする仏教教団を形成し、以上略述したように展開してきた釈尊の根本思想を集大成し、さらにガーター詩の原伝承からも自由に詩句を取入れつつ多数の韻文經典を創作していく。つぎには、それらの韻文經典において六処・五蘊などの、さらにそれを継承する散文經典において縁起などの原始仏教教理が成立していくことを論述してみようと思う。

ここで次下のプランを附記しておく。

2、『雜阿含經』『有偈篇』『神々章』

舍利弗尊者を長老とする仏教教団において祇園精舍

經典群がつくられ、まず個体存在が五種の認識能力プラス自我意識なる六種の存在であると解釈され、他方で欲望の対象(欲)という漂流物に依拠することもなく、身体存在(色)という繩に束縛されることもなく、最上位の禪定をよるこぶ存在(無色)として輪廻の洪水の底に沈んでいることもないというように解脱の自由を定義するようになる。しかも後者は、身体存在(色)・感情存在(受)・概念構想(想)・深層存在(行)・意識の流れ(識)から解脱して自由になることであると説明されるようになっていく。

3、『雜阿含經』『有偈篇』『魔章・比丘尼章』

次期の仏教教団において仏伝が発達していくのと平行して、いまや固有名詞となった仏陀の教えが六種の存在(眼耳鼻舌身意)と五種の存在(色受想行識)から解脱して自由になることであるとまとめられ、前者が「(六)処」、後者が「(五)蘊」とよばれている。それらが「馬車の如くに」部分の集合であって無我であり、「種子から芽が生ずる如く」自からも生じず他からも

生じないとも説かれている。

発達を説明することは困難であるであろう。

4、新層韻文諸經典

以上のように発達してきた韻文諸經典が集成されて「四諦説」が成立したりして、仏教教理が確立していく。

(あらまきのりとし・大阪大学教授)

5、初期散文縁起經典の成立

それまでの韻文經典の中の仏教思想、仏教教理もしくは重要な詩頌を展開させて散文經典が発達していく。「縁起説」は、この段階において成立する。その端緒の一となる經典は、無限の過去以来存続しつづけてきた意識の流れが「構想された対象存在たる漂流物に依拠する」か「輪廻の洪水の底に沈んでいる」かするときにのみ、死後も存続しつづけて個体存在として生れゆき老病死の苦悩を経験すると説く。そこにおける「意識の流れ」と「個体存在」の相互依存的条件づけが「縁起」と定義されていく。上述した韻文經典の発達を前提することなしには、このような散文經典の